# 保育の遊びにおいて子どもが「リスク」を見極めるために必要な能力とは

What skills are needed for children to identify "risk" in childcare play?

板東 愛理香
Erika Bando

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 人間生活科学専攻 博士後期課程

キーワード：保育，遊び，リスク
Key words：Nursing, Play, Risk

## １．研究目的

保育施設において保育者が，子どもの安全を守ることは無論重要である一方で，子どもの自由な発想や挑戦的な遊びを尊重することが必要である．また，目の前の状況における「リスク」を子どもがどの様に捉え見極めていくのかを育むことも保育者の役割であると言えよう．こうした子どもが「リスク」を捉え見極めていくためにはどの様な能力が必要であるのだろうか．

大坪ら[1]は子どもの「危機回避能力」を実証することを試みた．また，杉村ら[2]は「リスク・ベネフィット観」と子どもの発達との関係，そして保護者及び保育者における「リスク・ベネフィット観」の変化や調整について論じている．これらは子どもが「リスク」を見極めることの重要性を提起している研究であると言える一方で，子どもが「リスク」を見極めるために必要な能力とは何か迫る研究ではない．

すると，保育者は子どもが「リスク」を見極めていくためにどの様な能力が育つ必要があるのか感覚的に捉えることしかできない．その結果，子どもが自分から「リスク」を見極める重要性は保育者の間で必ずしも重要視されないことが懸念される．そうして，子どもの自由な遊びよりも安全を優先することで，極力保育者の目が届きやすいように遊びの範囲や自由度を制限することにつながりかねないと考えられる．

そこで本研究では，遊び場面において子どもが「リスク」を見極め判断するためにはどの様な能力が必要であるのか明らかにすることを目的とする．子どもが「リスク」を見極める能力にはどの様な能力の育ちが必要であるのかという発想は，保育現場の中では用いられているであろう．しかし，前述した様に学術的な研究の中で実証されてはいない．また，実際の遊びを見ていた保育者に事例場面の子どもたちの様子を問い，日頃から対象となる子どもたちの育ちについて検討を重ねている保育者に直接語ってもらうことで，子どもはどの様な能力の育ちによって「リスク」を見極めているのか明らかにするに迫る，個々の子どもたちの具体的な能力について抽出することを試みる．

## ２．研究実施内容

今年度は，研究の方向性を整えるとともに，研究方法の検討及び調査方法の検討につながる作業を中心に行ってきた．

### （1）研究の焦点を子どもから保育者へ

これまで，子どもが「リスク」を見極める能力を明らかにすることを目的としてきた．しかし，実際の保育施設においては，子どもがやりたいからといって遊びを行い，命に関わることが起きる事態に陥ってはならない．したがって，子ども「リスク」を見極める能力を明らかにすることに迫るには，まずは保育者がどの様に「リスク」をマネジメントしているのかを精緻に明らかにすることが先決であると考えられた．そこで本研究では，子どもが「リスク」を見極める能力を明らかにするためにも，保育者が遊び場面における「リスク」をどの様に捉えマネジメントしているのか明らかにすることを試みることとした．そして，保育者が「リスク」を捉えマネジメントする中で，子どもが「リスク」を見極める能力についてもどの様に考え関わっているのか抽出していきたいと考えた．

板東[3]は，保育の遊び場面における「リスク」概念を提案し，提案した「リスク」概念を基に大

型積み木という木製の玩具での遊び場面にはどの様な「リスク」があるのか，保育者はどの様に「リスク」を捉えているのか，理論的な枠組みによって抽出した．しかし，これはあくまで研究者の立場から「リスク」を抽出したに過ぎなかった．つまり，対象となった保育者自身が何を考え「リスク」を捉え，関わり方を決めていたのかということは反映することは出来ていない．そこで，板東[4]における遊び場面の「リスク」概念を精緻にすることを通して，保育者の「リスク」の捉えを明らかにする．

**（2）研究方法の検討**

**① 研究方法論の立場の検討**

本研究では「解釈的アプローチ」に依拠したいと考えた．「解釈的アプローチ」とは，現象学の哲学に起源がある．現象学は「いかなる現実も解釈によってのみ経験することができる」（Prasad, 2008）[5]ことが前提であり，生の事実や堅固な事実は存在しないと仮定されている．また先行知識や理解の介在によってのみ，社会現象の把握が可能であるとされている．また，研究の焦点は「観察された行動の意味，間主観的な理解，変数の説明」（柴山，2017）[6]とされている．それに対して本研究はというと，ある一名の保育者はどの様に「リスク」を捉えマネジメントしているのか，どの様な行動をし，それにはどの様な思考があるのかを明らかにすることを目的としたい．つまり，客観的なデータから保育者の「リスク」に対する捉えの一般化を行いたいのではない．また対象者を一名に絞ることで，ある保育者の行動と思考の両側面を分析し，保育者が遊び場面における「リスク」をどの様に捉えマネジメントしている構造があるのか，緻密に抽出していきたいと考えている点が挙げられる．したがって，「解釈的アプローチ」に立ち，現象や認識を捉えていく研究と言えると考えられた．

そして，対象者を一名に絞るという点を「理論的なサンプリング」[7]の考え方を参考にしていく．

**② これまでの保育者が「リスク」をマネジメントする専門性に着目する研究の整理**

保育者のリスクの捉えやマネジメントに対して，保育者に聞き取る手法を用いている研究がいくつか存在する．まず河合ら[8]は，両者のバランスをとる保育者の判断には「実践知」があるとし，遊具で想定されるリスクやリスクの増大要因を捉え，対応レパートリーを抽出することを目的に，質問紙で聞き取りを行なっている．また，野田，山田[9]は参与観察とインタビューから，園庭遊具が子どもの運動能力と危機回避能力を育てチャレンジ精神をもって遊ぶ場である方途を考察するとし，参与観察からは概念の整理，インタビューは園庭遊具に関するリスク管理の専門性とは何か明らかにすることを目的としている．しかし，これらの研究には次の様な課題があると考える．というのも，これらの研究は，対象保育者の語りまたは記述を，実際の実践とあわせて分析しているものではない．語ることや記述している内容が，対象の保育者自身の過去の実践に関する内容には変わりないが，同じ場面を研究者が追い，事例を抽出してはいないため抽出できるのは保育者が想起した断片的な内容のみになると考えられる．すると，保育者が回答した事例の前後の子どもの動きや保育者の動き，周囲の状況などの情報である，状況条件は保育者の想起から十分に捉えることは難しいと考えられる．つまり保育者が思い出す状況について語っているため，抽出できるのは語った範囲のみであり，語らなかった状況の条件を詳細に抽出することはできないだろう．

上記の先行研究における方法は，各保育者の保育観を明らかにすることは可能かと考えられる．しかし遊び場面のリスクマネジメントは，さまざまな要素が時間経過の中で発生と収束を繰り返していると考えられる．保育者はそうした要素を捉え，目の前の状況が子どもに許容可能かどうか見極めているのでは無いだろうか．すなわち「リスク」となる要素が多岐に渡り，その要素は時間経過とともに次々に変化していくことから，保育者の語りとともに実際のデータによって状況の情報を収集していなければ，保育者が捉えている状況の詳細をデータに反映することは難しく，実証的に保育者の実践からリスクをマネジメントする専門性を抽出することは困難だろう．したがって，語りや記述といった対象保育者の思考と，同じ対象保育者の実践を併せて分析する必要がある．

また上記の先行研究は，複数人の保育者から回答を得ることで比較している．複数人の保育者から回答を得ることで，客観的なデータの抽出を試み，保育者がリスクをマネジメントする際の考え方の一般化を図ろうとしていると捉えられる．しかし一般化するばかりでは，保育者が語った背景は車掌され，実際に保育者がどの様な状況においてどの様にリスクを捉え，どの様な意識や理解が

あってマネジメントしているのかを明らかにはならない．したがって，一名の保育者を対象とし緻密な分析を行う研究が必要である．

**（3）調査対象の検討**

**① 対象となる遊びの検討**

調査対象となる遊びは木製の大型箱積み木が適していると考えている．その理由としては，まず木製の箱積み木の特徴として大きさ，重さがある遊具であることが挙げられる．また可動型の遊具であり木製のため積み木同士は滑りやすい性質を持っていることなど，比較的リスクの出現がわかりやすい遊具であると考えられる．その一方で，子どもたちが自由に置き方や積み方を変えることができ，積み上げた積み木の内側に入り，イメージを広げて遊ぶことができる．また，設定されたコーナーの遊びではなく，子どもたちが主体的に遊びの拠点として繰り返し作り変えていくことができる遊具であると考えられる．箱積み木に関する先行研究は少ないが，宮田[10]は木製ではなくウレタンやコルク製の箱積み木であるが，箱積み木について「他者と協同していく場面が自ずと見られるもの」としている．この様に，「リスク」のプラス面とマイナス面が観察時に抽出しやすいことから，「リスク」の抽出対象として適しているのでは無いかと考えた．

**② 調査対象園，調査対象者の検討**

今年度，調査対象を検討する上で２園の見学をさせていただいた．その中で，１園が本研究における「理論的なサンプリング」の「典型事例」として適することから調査の依頼を予定している．

**（4）調査方法の検討**

現段階では，調査方法を次の様に検討している．まず映像データを，５歳児クラスの箱積み木コーナーを対象にカメラ２～３台を用いて複数の角度から，保育者の動き，子どもの動き，箱積み木の状態，周囲の状況等を撮影する．そして，保育後に映像を撮影した遊び場面を見ていた担任保育者に対し，保育後に箱積み木の遊びで気になった，気になっていることを問うことで，保育者が意識をとめた事例を抽出する．そして保育者があげた場面の映像を，筆者がその場で再生し，保育者がその当時の状況を思い出すことで，さらに語っていただく．その中で，私の方から保育者に問うことは「どの様な考え，理由があった（映像の）行動をしていたのか」「どの様なことに意識をとめてリスクマネジメントしているのか」「リスクマネジメントにはどの様なことが重要で必要であると考えているか」といった内容である．

## ３．まとめと今後の課題

現在，保育の遊び場面におけるリスクマネジメントはそもそも数が少ないが，研究レベルでは理論的枠組みの提示でとどまっているものが多く，さらに示される理論的枠組みの多くは実際の事例から抽出した枠組みではない．一方，実践レベルでは，目の前の事例から明日どのように対応するか，理論は基に無い検討が喫緊した明日の保育のためになされている．

つまり理論的枠組みを基盤に，実践を組み合わせることが本研究の独自性であり，今回実際の事例からの理論的枠組みとなる要素の可能性を確かめ，かつ保育者の経験から培われてきた行動と思考を組み合わせるモデルが明らかになることで，実践の中で実態に即したマネジメントを行うことにつながるのではないかと考えている．

今後の課題としては，研究方法論上の問題が挙げられる．前述した様に，本研究は「解釈的アプローチ」に依拠する．そのため，博士論文全体を構成する各研究における認識論の立場の齟齬がないよう整えていく必要がある．

**引用・参考文献**

[1]大坪龍太ほか．子どもの遊び場におけるリスクの効用に関する研究．こども環境学研究．2011，7(1)，p. 86-91.
[2]杉村伸一郎ほか．保育における遊びのリスクベネフィットバランスに関する総合研究．科学研究費助成事業研究成果報告書
[3]板東愛理香．遊び場面におけるリスクネジメントー大型積み木を使用する初期段階の事例を通してー．修士論文．大妻女子大学，2021.
[4]板東愛理香．保育の遊び場面における「危険性」概念の構造．保育学研究．2022，60(2)，p. 91-101.
[5]Prasad,P．質的研究のための理論入門．ナカニシヤ出版，2018.
[6]柴山真琴．質的研究の計画―実行―報告における質の検討．保育学研究．2017，55(3)，p. 106-111.
[7]能智正博．質的心理学 創造的に活用するコツ．新曜社，2004.
[8]河合美保，柴田知江，青山昌子，村越真．遊具遊びのリスクへの気づき：幼稚園教員の実践知の視点からの検討．2020，30，p. 39-48.

[9]野田舞，山田真紀．園庭遊具の遊びの価値と安全性を高める方法についての実証的研究－ハザードとリスクの概念を中心に－. 保育学研究, 2018, 56(2)，p. 39-50.
[10]宮田まり子．３歳児の積み木遊びについて－行為と構造の変化に着目して－. 保育学研究, 2013, 51(1)，p. 50-60.

**付記**
本研究は大妻女子大学人間生活文化研究所の研究助成(DA2204)「保育の遊びにおいて子どもが「リスク」を見極めるために必要な能力とは」を受けたものです.